

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370757

研究課題名(和文) アジア・太平洋海域における有田焼交易ネットワークの考古学的研究

研究課題名(英文) The Archaeological Study on the Trade Network of Arita Porcelain in the Asia-Pacific Region

研究代表者

野上 建紀 (NOGAMI, Takenori)

長崎大学・多文化社会学部・准教授

研究者番号：60722030

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：アジア・太平洋海域の有田焼交易ネットワークについて、考古学的な研究によって明らかにした。近世の有田焼がいわゆる「鎖国」政策下にオランダ船や唐船によって長崎からアジアやヨーロッパへ輸出されていたことは知られている。その一方、長崎で交易が許されなかった船も有田焼を運んでいたことはあまり知られていない。太平洋を越えて、アジアとアメリカを結んでいたガレオン貿易を担ったスペイン船もその一つであった。

今回の研究により有田焼が中米・カリブ海周辺にも広く流通し、ペルーやコロンビアなど南米にまで輸出されていたことが明らかになった。特に芙蓉手皿とよばれる皿類やチョコレートカップが広く流通していたこともわかった。

研究成果の概要(英文)：The history of export of Arita porcelain started in the middle of 17th century. And it is well known that Chinese ships and Dutch ships exported Arita porcelain from Nagasaki to Asia and Europe in the early modern period. On the other hand, it is not known well that Spanish galleon ships had carried Arita porcelain from Manila to Acapulco. Therefore the major aim of this study was to understand about trade network of Arita porcelain in the Asia-Pacific region. In 2014-2016, I went to Mexico, Cuba, Peru and Colombia and researched on ceramic sherds excavated from there. And I found many pieces of sherds of Arita porcelain in Latin America and analyzed them. Most of them were blue and white dishes with the design of Kraak and chocolate cups. And they include the first archaeological evidences that Arita porcelain had been exported to South America.

研究分野：考古学

キーワード：ガレオン貿易 有田焼 ラテンアメリカ チョコレートカップ 陶磁器貿易

## 1. 研究開始当初の背景

近世初頭、有田において日本で初めての磁器が生産された。磁器生産開始から半世紀も経ずに、有田焼は当時の海外貿易港であった長崎から輸出されるようになった。

明から清への王朝交替やその後の清による海禁政策などの東アジア情勢に恵まれながら、17世紀後半には有田焼は盛んに海外輸出されるようになったが、当時はいわゆる「鎖国」政策下であり、必ずしも海外貿易に恵まれた条件が整っていたわけではなかった。

しかしながら、有田など肥前では、他の多くの工業製品の生産業がようやく19世紀に至って成立させたマニファクチュア(工場制手工業)を17世紀中頃にはすでに成立させていた。さらに生産工程における分業だけではなく、需要別の地域的分業も成立させ、生産地として成熟させることに成功した。高度な生産技術と官民一体となった生産体制の確立があったのである。技術力の高さと高度に分業化された生産システムによって、いわゆる「鎖国」という制限された輸出環境の中で世界中の需要に応えることを可能としたのである。

一方、有田焼の海外輸出の担い手として、長崎に入ることが許されたオランダ船や唐船の存在があり、特にオランダによってヨーロッパに運ばれたことはよく知られているが、有田焼はヨーロッパだけではなく、アジア、アフリカ、北米、南米など5つの大陸に渡っていた。しかし、アジアとヨーロッパを除いて、南北のアメリカ大陸やアフリカなどは有田焼の海外流通における研究の空白地帯のままであった。

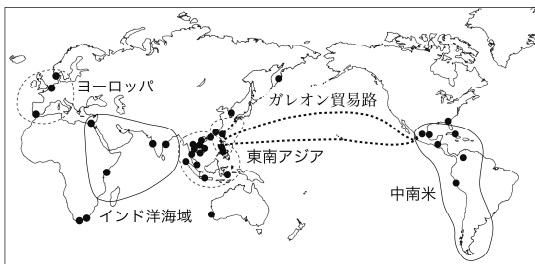


図1 17～18世紀の有田焼の流通圏(出土分布)とガレオン貿易路

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、有田焼の海外流通における研究の空白地帯の一つであるアメリカ大陸における流通の実態を明らかにし、アジア・太平洋海域の交易ネットワークを考古学的に復元することである。

近代以降、日本の工業製品は太平洋を越えてアメリカ大陸へと渡っていった。それは日米間に貿易摩擦を生むほどに盛んとなった。太平洋の貿易ルートは、日本にとってはもちろんのこと世界にとっても最も重要な貿易ルートの一つとなっている。近世の有田焼はその工業製品の先駆けと言ってもよい。この海域における有田焼の先駆的な海外輸出の実

態の解明を行い、我が国の工業製品の貿易史の一端を明らかにしたい。

## 3. 研究の方法

本研究は南北アメリカの両大陸に輸出された有田焼を生産、流通、消費の各方面から考古学的に研究するものである。すなわち、生産については生産地である有田の窯跡出土資料の整理を行い、流通については交易ネットワークの結節点である港市の出土資料の調査を行った。そして、消費については研究の空白地帯の一つとなっている中南米を中心とした地域の出土状況の調査を行い、相互の資料を比較しながら輸出の実態を明らかにした。

### (1) アジア、中南米出土の東洋磁器の分析

アジア、中南米各地で出土している東洋磁器を生産地、年代、器種、器形について分類し、資料化および統計化した。資料化は、現地の博物館等の施設において、スケール1/1の実測図を作成し、写真撮影を行った。統計化は生産地、年代、器種、器形ごとに破片数から比率を算出した。

### (2) 中南米出土の有田焼の抽出

中南米から出土した東洋磁器の中から有田焼を抽出し、生産地の窯跡や交易ネットワークの港市の資料と比較しながら、その傾向を分析した。

### (3) アジアと中南米出土の有田焼の比較研究

アジア海域、中南米・カリブ海から出土した有田焼の資料の相互比較を行いながら、研究全体の総括を行った。

## 4. 研究成果

本研究の成果は、中米、カリブ海、南米に流通した有田焼の実態を明らかにしたことである。その中でも最も大きな成果は、南米大陸への有田焼の輸出を考古学的に証明したことである。以下、それらの成果について述べる。

### (1) 中米に流通した有田焼

中米で初めて有田焼の出土が確認されたのは1970年代のことである。「海のシルクロード」の提唱者である三杉隆敏は、メキシコシティ地下鉄工事の際の出土陶磁片の中に17世紀後半の有田の染付芙蓉手皿の破片を発見した(三杉1986)。その後、考古資料としての有田焼の発見は続かなかったが、2006年に筆者はメキシコシティの出土遺物の調査を開始し、これまでにテンプロ・マヨール遺跡を中心に70点以上の有田焼の破片を確認している。さらにメキシコシティ以外のメキシコ諸都市(オアハカ、ベラクルスなど)やグアテマラのアンティグアなどで発見した約160点の有田焼の破片を合わせると、中米全体ではすでに240点ほどの有田焼の破片

を確認していることになる(野上 2013)。

これらの成果をもとに、本研究では中米全体の陶磁器需要のあり方を調べることにした。すなわち、これまで有田焼が発見されている遺跡はいずれもスペイン人社会の都市部の遺跡であり、特に教会や修道院などの宗教施設が多い。有田焼の需要の多くがこうした社会や階層のものであったとしてもそれらが必ずしも中米全体の需要を反映しているわけではない。そのため、ガレオン貿易の荷揚げ港であるアカプルコやサン Blas から出土した陶磁器の調査を行った。荷揚げ港の都市であれば、出土品の中に最終的な消費地に運ばれる前の製品が含まれており、特定の社会や階層ではなく、中米全体の陶磁器需要が明らかになると考えたためである。有田焼の出土は確認できなかったが、メキシコシティの中心部から出土する磁器とは品質や種類の異なる製品が数多く見られた。すなわち、サン Blas では 18 世紀後半以降の福建・広東系の粗製磁器が数多く含まれていた。

また、これまで中米で確認されていた肥前磁器はほとんど有田の製品であったが、今回のメキシコシティの調査では、三川内焼の可能性が高い製品の出土も確認された。

#### (2) カリブ海に流通した有田焼

キューバのハバナから出土した東洋磁器の調査を行った。ハバナ市内では旧市街の歴史地区を中心に各遺跡から東洋磁器が出土している。16 世紀後半から 19 世紀初めの中国磁器が大半を占めるが、有田焼も数点確認することができた。確認された有田焼は染付のチョコレートカップであり、中国磁器のカップ類の多くもチョコレートカップであった。中米の出土状況と同様の傾向を示している。

#### (3) 南米に流通した有田焼

##### ペルー

リマ、カヤオ、アレキパ、クスコなどの各都市およびペルー北部の集落において陶磁器調査を行った。その結果、ペルーでは 3 つの遺跡で有田焼の出土を確認することができた。南米における初めての発見であり、近世の有田焼が太平洋を渡り、南米にまで輸出されていたことを考古学的に証明することができた。確認できた有田焼はいずれも染付チョコレートカップであり、中米やカリブ海で発見されるものと同種のものであった。共通の需要であったことがわかる。

##### コロンビア

ボゴタ、トゥンハ、ピジャ・デ・レイバ、オカーニャ、カルタヘナ、サンタ・マルタ、マドリッド・クンディナマルカ、ポパヤンから出土した陶磁器の調査を行った。発掘調査例が少なく、出土陶磁器の量も多いものではなかったが、16 世紀第 4 四半期～17 世紀前半、17 世紀第 4 四半期～18 世紀前半にかけ

ての中国磁器の出土を確認した。近代の製品以外に有田焼などの日本磁器の出土は確認できなかったが、トゥンハのサント・ドミンゴ教会の壁面に 17 世紀後半の有田焼の染付芙蓉手皿が装飾の一部としてはめ込まれていることを確認した。考古学的な証明ではないが、コロンビアまで当時の有田焼が流通していた証とみてよいであろう。

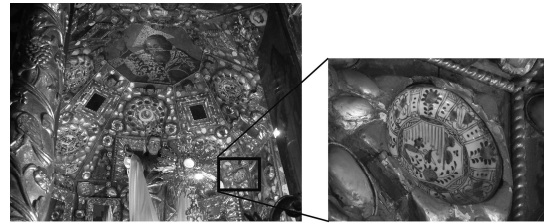


図2 コロンビアのトゥンハのサント・ドミンゴ教会に残る有田焼

#### (4) ラテンアメリカの陶磁器需要

##### フィリピンとラテンアメリカの比較

ガレオン貿易のアジア側の拠点であるフィリピンから出土した肥前磁器とラテンアメリカから出土した肥前磁器の数量的な対比を行った。器種を比較すると、フィリピンでは芙蓉手皿が 75% 以上を占めるのに対し、ラテンアメリカではチョコレートカップを主としたカップが半数以上を占めて、芙蓉手皿などの皿類は 30% 程度にとどまっている。フィリピンではチョコレートカップは数% を占めるに過ぎないため、肥前磁器のチョコレートカップはフィリピンで消費するためというよりラテンアメリカへ輸出するためにフィリピンに輸入されたものと考えられる。一方、皿については、フィリピンとラテンアメリカでは生産窯の比率が異なっている。フィリピンでは芙蓉手皿の内、2/3 が有田外山地区や嬉野地区で焼かれた粗製のものであるのに対し、ラテンアメリカではほとんどが有田の内山地区を中心に焼かれた比較的良質のものである。マニラからラテンアメリカに向けて輸出する際に、品質により取捨選択されたものと思われる。遠隔地に運ぶ価値があるものが選ばれたということであろう。

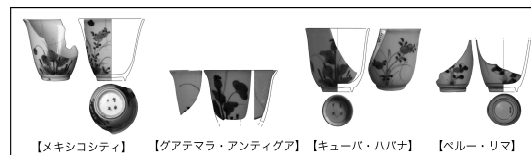


図3 中南米・カリブ海各地で出土する有田焼のチョコレートカップ

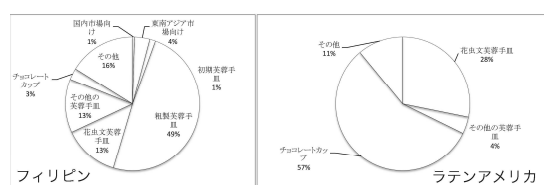


図4 フィリピン・ラテンアメリカ出土の肥前磁器の種類別割合

ラテンアメリカ地域内の比較  
ラテンアメリカにおける有田焼の流通範囲が中米にとどまらず、広くカリブ海や南米にまで及んでいたことが明らかとなったが、出土した資料が示す陶磁器需要の性格は、ラテンアメリカ全体で地域を越えて共通している。むしろ地域内での社会や階層による違いをみていく必要がある。そして、あえて地域間の相違点を挙げるとすると、やはり中米の大都市が種類や数も豊富であるのに対し、南米は種類と数が限定されている。中米のメキシコシティ周辺を中心として、その中心から離れるほど出土量が減少する傾向にある。もっともこれは発掘調査事例の数によるところが大きいのかも知れない。今後の調査事例の増加を待つ必要がある。

<引用文献>

野上 建紀 2013「ガレオン貿易と肥前磁器—二つの大洋を横断した日本のやきもの」『東洋陶磁』第42号、141-176頁  
三杉 隆敏 1986『世界の染付6 陶磁片』同朋社出版

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

野上建紀・エラディオ テレロス エスピノサ 2017「コロンビアに渡った東洋磁器」『多文化社会研究』3号、165-177頁、査読無

野上建紀・エラディオ テレロス 2016「ペルーに渡った日本磁器」『横浜ユーラシア文化館紀要』4号 1-17頁、査読無

野上建紀 2016「ガレオン貿易と中国磁器—新大陸に向かう東回りの陶磁の道—」『東洋陶磁』45号、59-79頁、査読有

野上建紀 2015「清朝の海禁政策と陶磁器貿易」『金沢大学考古学紀要』37号、43-52頁、査読無

野上建紀・エラディオ テレロス エスピノサ 2015「ハバナ出土の東洋磁器」『多文化社会研究』1号、141-157頁、査読無

〔学会発表〕(計9件)

野上建紀「マニラ・ガレオン貿易で運ばれた東洋磁器」(東南アジア考古学会 2016年度研究大会・鶴見大学:神奈川県横浜市・2016年11月27日)

野上建紀「陶磁器研究における沈没船からの視点」(第37回日本貿易陶磁研究集会・立教大学:東京都池袋区 2016年9月17日)

NOGAMI, Takenori・TANAKA, Kazuhiko「Oriental Ceramics traded to the American Continent via Manila, Philippines」(第8回世界考古学会議・同志

社大学:京都府京都市 2016年8月28~30日)

野上建紀「近世磁器生産における日本と中国の影響関係」(日中社会学会第28回大会・長崎ブリックホール:長崎県長崎市 2016年6月4日)

野上建紀「ペルーに渡った東洋磁器」(金沢大学考古学大会・金沢大学:石川県金沢市 2015年11月22日)

野上建紀「ラテンアメリカにおける肥前磁器流通」(第11回海港都市国際研討会・中央研究院:台湾・台北市 2015年4月24・25日)

野上建紀「新大陸に向かう東回りの陶磁の道の研究成果と最新情報」(東洋陶磁学会第42回大会・日比谷図書文化館:東京都千代田区 2014年12月7日)

野上建紀「ガレオン貿易と肥前磁器」(金沢大学考古学大会 40周年記念大会・金沢大学:石川県金沢市 2014年11月1日)

野上建紀「海禁令下の陶磁器貿易—海港都市の考古資料をもとに」(The 4<sup>th</sup> International Conference of the World Committee of Maritime Culture Institutes・韓国海洋大学校:韓国・釜山市 2014年4月25日)

〔図書〕(計4件)

野上建紀 2017『伊万里焼の生産流通史—近世肥前磁器における考古学的研究』中央公論美術出版、本文649頁

野上建紀 2017『アジア・太平洋海域における有田焼交易ネットワークの考古学的研究』平成26~28年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)131頁

野上建紀ほか 2016『中近世陶磁器の考古学』第三巻、雄山閣(「ラテンアメリカに流通した肥前磁器」281-304頁を執筆)

野上建紀ほか 2015『中国陶磁 元青花の研究』高志書院(「有田皿山における藩窯の成立背景」277-289頁を執筆)

6. 研究組織

(1)研究代表者

野上 建紀 (NOGAMI, Takenori)  
長崎大学・多文化社会学部・准教授  
研究者番号:60722030

(2)研究協力者

エラディオ・テレロス (Eladio Terreros)  
テンプロ・マヨール博物館・研究員